

キリンになめられた話

キリンになめられた話

どちらかと言えば…、キリンは好きな動物だった。好きではあるけれど、それ以上どうこうしようという気も起きない、まあ、感じのいい動物ね、といったところだ。

キリンは動物の中で一番背が高いそうである。そ

して際立って首が長い。言われてみれば、いま生きている動物で、キリンより長い首は思い当たらない。長さだけなら、大昔の恐竜の首はもっと長かったかもしれないが、体全体とのバランス、特に水平方向の体長との比較で言えば、縦に伸びているキリンの首の長さはきわめて特異と言わねばならない。

生きている実物大のキリンをはじめて見たのは、これまたこども時代の上野動物園である。

檻を遠くに見つけたあたりから、それとはっきり分かった。檻の、というか周りを囲っている網のずっと上の方に、首だけが突き出ている。キリンとは、遠くから首を認識する動物だった。

キリンになめられた話

檻に近づいて見上げると、やはり遙か空のほうに首がある。自由に動けるほどのスペースはあったはずだが、自分を囲む檻の天井を突き破って首を出している状態というのは、人間で言えば胸の高さの檻に囚われているということ、それはそれで天井のある部屋に閉じ込められているのとはまた別の奇妙な閉塞感があるのではないか。高く掲げた頭をめぐらして、ずっと遠くまで眺めることができるのだから、かえって不自由の思いも格別ではないかと想像される。

しかしキリンの顔はそのような不自由さを少しも見せてはいなかった。動物園の檻の中においても、動

物たちはさまざまな心理状態を表すものだけれど、ことキリンに限っては、うれしいとも悲しいとも、およそ感情らしきものを感じたことはなかった。キリンは恬淡な動物、それが私の印象だった。

キリンに関して大きな感動を覚えたのは、多摩動物園に行った時だ。起伏のある広い敷地に、それぞれの動物が自然な活動に必要なスペースを与えられていた。おかげで動物から動物へと見て歩くと、人間のほうはへとへとに疲れたが、動物たちは上野動物園よりずっと居心地が良さそうに見えた。

なかで最も印象的だったのがキリンだった。もはや檻ではない。広々としたグラウンドである。ここにたくさんのキリンがいて、人間は周りの小高い土

キリンになめられた話

手から、少し見下ろし気味に眺めるようになっていた。もう四十年近くも昔のこと、その後改装されたかもしれないし、私の記憶もすでに不確かだが、アフリカの平原を思わせる大地に、三々五々とゆるやかに群れをなすキリンたちの姿はまことに美しいものだった。広く平らかな草地なればこそ、長い首も役に立つというもの。一瞥、遙か遠くの敵を見つけることができるのだ。

キリンはこういうふうに生きているのだなあ、と私は心から納得した。広い場所でも彼らは慌てず騒がず、ゆったりと生きていた。上野動物園の檻で見るよりずっと遠くなったが、その姿形はむしろ鮮明に、まるで静けさ、穏やかさを絵にしたようだった。



キリンはやはり遠くて、物静かな動物だったのだ。

* * *

そんなキリンのイメージを一変させる事態に遭遇した。アフリカでのことである。

一九九八年、私は勤めていた大学の研究休暇を得て、パリを基点にあちこち旅行していた。

かつて留学時代にディジョンで一緒だった友人が、ちやうどその頃、商社マンとしてケニアのナイロビにいたので、冬休みに遊びに行きたいと連絡を取っ

キリンになめられた話

た。ちょっと迷惑そうな返事が来たけれど、中央アフリカを訪れる機会など、そうそうあるものではない。あまり図々しいことはしない質だと自分では思っているが、この時ばかりは最大限の厚かましさを発揮して、ついにケニア旅行に漕ぎつけた。

その旅は、言葉につくせぬほど素晴らしい経験だった。

いままでに、ああ、自分の生き方はまちがっていた、もっとおおらかに、心の奥底の思いを解き放って生きるべきだった、そう感じたことが二度ある。一度はスペインのアンダルシアに行った時。そして二度目がケニアに行った時だ。いや、重要なのは時ではなくて土地かもしれない。飛行機を降りて、そ



の土地の空気に触れたとたん、心と体を縛っていたかがポンと外れたような気がする。

その感じをどう言い表したらいいだろう。まことに唐突で、キリンともアフリカとも関係がないが、グリム童話のなかで私が一番好きな件りは『かえるの王さま』の末尾、かえるの姿から王様に戻った主人公が、お姫様とともに自分のお城に帰る馬車の中、何か弾ける音を耳にして、家来に言う。

「ハインリヒ、馬車がこわれるぞ。」

「いいえ、いいえ お殿さま、

あれは馬車では ござんせぬ。

キリンになめられた話

せっしやのむねに はめたたが。
殿さま、げえろにならしゃって、
ぎやあぎやあ、泉でなかしやるで、
はりさけそうな このむねを、
むりにおさえた そのたがが。」

(楠山正雄 記)

悲しみに張り裂けるのを抑えたたがが、いま喜びで外れる。というほど大げさではないけれど、ポイント小さなたがが外れる感じ。ケニアはそんなふうだった。(この旅のことは『世界の旅を見てまわる』(新書館)という本にも書いたので、興味のある人は覗いてみてほしい。)

めんどくさそうな返事をくれたわりには、ケニア在住の友人と奥さんはとても親切に、至れり尽くせりの歓待をしてくれた。原始生活を守っているマサイ族の部落にも連れていってもらったし、アンセボリ国立公園で象やライオンを見たことも(ライオンも、危険を感じないと仰向けに寝るのだ!)、真の闇に怯えたのも(文明社会には本物の闇がないと知った)、じつにじつに得がたい経験だった。

滞在中も終わりに近づいた一日、ナイロビ近くのキリン園に連れていってくれると言う。キリンをたくさん飼っていて、近くで見ることができるとのこと。私はあまり期待しなかった。それまでさんざん野

キリンになめられた話

生動物を見たし、それらと比べてキリンは特に見た
い動物だとも思わなかった。

そこは大きなグラウンドだった。多摩動物園のそ
れとよく似た、もしかしたらそれより狭いかもしれ
ない浅い窪地に、キリンたちが集まっている。まわ
りが小高い土手になっているところも同じだ。

違うのは、グラウンドの周囲を高架の回廊が取り
巻いていること。観客はそこを歩いて見物するよう
になっている。劇場の二階バルコニー席とか、スポ
ーツアリーナの観覧席の一例目を想像するといひ。

入り口から粗末な木造りの階段を上がっていくと、
回廊には見物人がまるで輪に取り付けた鈴のように
転々と並んでいるのが見えてきた（もしかして、「鈴



なり」とはあれを言うのであったか？)。だがその
ようすは遠い静かな動物を眺めているといったふう
ではなく、キャアキャアと騒がしい。キリンを相手
になぜそのような…、と思うまもなく、すぐ近くに
いた女性がこちらを見て、大きな声で何か叫んだ。

いま思えば、おそらく「なめるのよう」と言った
のだろうが、国籍もわからない人から突然言われた
ことなので、何のことか見当もつかない。いや、日
本語で言われたとしても、わからなかったのではな
いか。キリンを見に来た身にとっては、それはあま
りに想定外のことばで、ナメル？ 何のこと？ とい
う感じだ。

キリンになめられた話

しかし、すぐに事態が飲み込めた。一目瞭然だったから。

回廊に並んでいる見物人のところにキリンがやってくる。するとキリンの顔と見物人の顔が同じ高さになった。目の前にあるその人間の顔を、キリンたちはペロペロなめるのである。

それも尋常ななめ方ではない。キリンの顔は人間の顔よりかなり大きいから、舌も大きい。それを思い切り突きだしてなめる。そればかりか、大量の唾を出し、それを口の端からグラグラ垂れ流しながらなめるのだ。ペロペロなどと生やさしいものではない、こちらは顔も手もペロペロである。

なめると言えば、犬もなめる。しかしそれは飼



主やそれに類する限られた相手に向かって、それも大きな親愛の情を表す時だけであって、誰彼かまわず近づいたらなめるというものではない。私も犬になめられたことはあるが、適度な湿り気はあるもの、さほど気になるものではない。ねっとり粘りけがあって糸を引く唾液を大量にこすりつけたりはしない。

しかしキリンはそんなふうには、極端ななめ方をする。そして、思いのほか、なめながら相好をくずし、目尻を下げて、うれしくてたまらないような顔をするのだ。

鈴なりの見物人は、なめられながら皆ギャアギャ

キリンになめられた話

ア騒ぐ。恐れをなして数歩引けば、もうキリンの舌は届かないのだけど、それでもたいていの見物人は泣き笑いのような声をあげながらわざわざなめられていた。

ただそれだけの場所だった。動物園といえば動物園、見世物といえば見世物だが、でも見世物になっていたのは動物よりも人間のほうだったような気がする。キリンになめられる、ただそれだけなのだが、かなり刺激の強い、ふしぎな精神的発散を伴う体験スポットだった。

それにしても、あの仕掛けはいったい誰が、どういう思惑で考えついたのだろうか。現実にはヒトがキリンになめらるという、かなり平たい事件以外に



何もことは起こらないわけで、とすれば最初からそれが目的だったのかもしれない。だが真正面からそうと認めると、なにやら割り切れない思いもするのでは、どうしたわけだろう。

あるいは、もっとまっとうに考えて、地上で一番高く、ふつうなら遙か見上げるしかない動物を、顔と顔つきあわせて見るといふ趣向だったのかもしれない。それがやってみたら（思いの外に？）キリンがヒトを猛烈になめた、のであったらどうか。

いずれにもせよ、以降、テレビや雑誌でキリンを見かけると、反射的に「なめるのよ」と思ってしまう。そう、あの時の外国人女性のように。そして

キリンになめられた話



それは私としては、ちょっと残念なことでもある。
広々とした草原に点々と佇む、あの遠くて物静かな
動物のイメージが崩れてしまったのだから。

(初出 ホームページ「佐々木涼子の部屋」二〇一六年十二月)